

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

An Analysis of a Maternity Nursing Training
Course Incorporating Internship Program at the
Elementary and Junior High School Health Class

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-09-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: NAGAMATSU, Miyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/620

活動報告

母性看護学に小・中学校保健実習を取り入れた
学習成果の分析An Analysis of a Maternity Nursing Training Course
Incorporating Internship Program at the Elementary and
Junior High School Health Class

医療福祉専門学校 緑生館 看護学科母性看護学専任教員

永 松 美 雪

Miyuki NAGAMATSU

Technical School of Medical and Welfare Ryokuseikan

抄 録：看護学生は周産期の対象に比べ、思春期の対象への関心は低い。そこで、母性看護学実習に健康な思春期の特徴を理解させる目的で、小・中学校保健実習を取り入れた。3年次学生46人を対象として、小学校14校・中学校9校で実習を行い、実習評価表および実習記録より、目標別学習到達度と実習体験内容を分析した。また、実習前・実習直後・実習3か月後にアンケートを行い思春期の対象に対する関心度の変化を検討した。1)すべての目標の学習到達度は70点以上であった。2)思春期の対象を観察し、直接かかわる実習体験をした学生が多かった。3)実習前に比較して実習直後は思春期の対象への関心が有意に高まった。関心が非常にあると答えた学生が実習直後と比べて、実習3か月後は減少した。4)実習前に比較して実習3か月後は思春期の対象に自主的にかかわった学生が増加した等、実習の成果が認められた。今後は思春期の対象への関心を継続させることが課題である。

Synopsis : Nursing students tend to have less interest in adolescence than in perinatal period. Therefore, an internship program at the elementary and junior high school health class was incorporated into a maternity nursing training course so that nursing students could learn about characteristics of adolescence.

Forty-six 3rd grade nursing students participated in the internship program introduced at 14 elementary and 9 junior high schools. An analysis was made on the students' academic achievements in each target performance area as well as on their learning experience. For the analyzing purpose the internship evaluation and records of nursing students were used. In addition surveys were conducted immediately before and after internship, plus 3 month after the program so as to study changes in students' interest in adolescence.

The findings were as follows:

1. Academic achievements of the students were 70 points or higher in all performance areas.
2. Most students made observation of or were directly involved in the subject of adolescence.
3. Post-internship students showed significantly higher interest in adolescence than in pre-internship period. However, compared with the immediate post period, such strong interest was found to have decreased in 3 months after internship.
4. The increasing number of students became involved in the subject of adolescence even 3 months after the completion of internship.

Our future agenda is how to maintain students' interest in adolescence.

Key Words : Adolescence, School health, Maternity nursing training course

緒 言

少子社会において、母性・父性としての役割・機能を健全に発揮できるようにするためには、母性看護の対象は妊産褥婦のみでなく、広く母性・父性機能にかかわるすべてのライフステージの対象に健康の保持増進、疾病の予防に応じた援助が必要である。前原¹⁾が述べるように母性として健全に成長発達を遂げるためには、母性準備期である思春期の援助が重要である。しかし、「健やか親子21」において、母子を対象とした保健対策に比べて、思春期の健康と性の問題を解決・支援するための対策は十分とはいえない。看護基礎教育においても、母性看護学実習のほとんどが周産期の対象である。そのため、思春期の対象にかかわる機会が少ない看護学生にとって、周産期の対象に比べ、思春期の対象への関心は低かった。

そこで、当校の母性看護学実習において、学校保健活動を通して、健康な思春期の特徴を理解し、母性・父性としての健全な発達のための看護を実践できる基礎的能力を養うことを目的とし、従来の産科病棟・産婦人科外来実習の他に小・中学校保健実習を取り入れた。その結果を報告する。

1. 研究の対象及び方法

看護学科2年課程（昼間定時制）の3年次学生46人を対象とした。全員准看護師の資格を有し、3年間で卒業予定であり、今回の研究に対して承諾を得ている。

1) 実習評価表および実習記録の分析

実習評価表を用いて、実習目標別の学習達成度を、5段階（20点：よくない、40点：あまりよくない、60点：ふつう、80点：よい、100点：非常によい）で学生自己評価と教員評価を行った。実習記録から実習で体験（見学、参加）できた内容を分析した。

2) 学生に対するアンケート

アンケートを実習前、実習直後、実習3か月後に行った。（有効回答45人 有効回答率97.8%）

表1 実習目標

1. 思春期の身体の発育について説明できる。
2. 思春期の精神の発達について説明できる。
3. 思春期の健康に影響している因子を述べることができる。
4. 思春期におこりやすい身体と精神の健康問題を述べることができる。
5. 思春期の援助の必要性を認識できる。
6. 母性・父性としての健全な発達のための性教育の内容と方法を述べることができる。
7. 思春期の看護の役割と他の職種との連携の必要性を表現できる

表2 実習方法

- ①授業や学級活動を観察し、休み時間等に生徒とのコミュニケーションをはかる。
- ②昼食（給食）の様子を観察する。
- ③保健室でのけが・疾病の対応や悩みの相談を観察する。
- ④健康診断に参加する。
- ⑤予防接種に参加する。
- ⑥性教育に参加する。（または過去に実施された性教育の内容より学ぶ）

アンケートの内容は1. 思春期の対象への関心度を5段階（5：非常にある、4：ある、3：ふつう、2：あまりない、1：ない）で評価。2. 思春期の対象とかかわった経験の有無。3. 思春期の対象に援助した経験の有無である。

統計処理はJSTATによるWilcoxonの符号付順位和検定で行い、 $p < 0.05$ をもって有意差ありと判定した。

3) 実施した実習の内容

実習は小学校14校・中学校9校で、学校保健法施行期間中の1週間（月火木金の4日間、水曜日は学内学習）行った。

実習目標は7項目とした（表1）

実習方法は6項目とした（表2）

なお、実習終了後、学内で実習反省会を各学校別に以下の内容で行った。

- ① 実習で体験した内容と方法
- ② 実習目標別に学習した内容

Ⅱ. 研究 結果

1. 実習評価表および実習記録の分析

1) 実習目標別学習到達度の学生自己評価と教員評価 (図 1)

結果は、すべての目標は学生自己評価も教員評

価も70点以上であった。学生の自己評価と教員の評価がともに最も高かったのが「身体の発育について説明できる」であった。最も低かったのが「母性・父性としての健全な発達のための性教育の内容と方法を述べることができる」であった。性教育を見学・参加できた学生 (42%) 以外で、

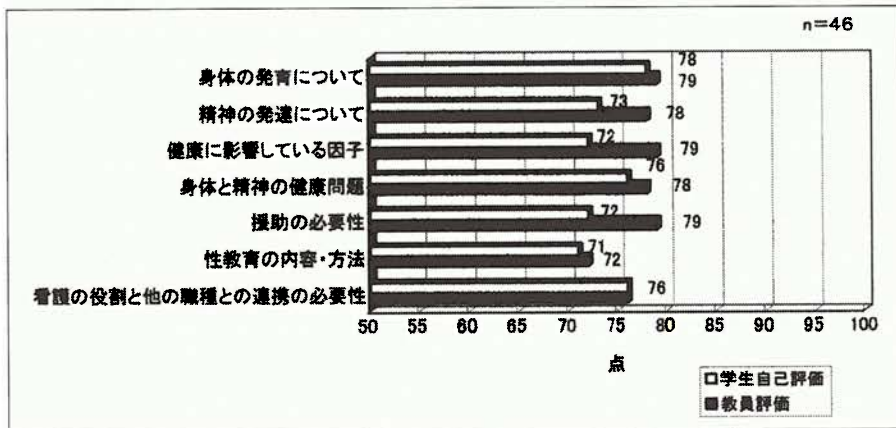


図 1 実習目標別学習到達度の学生自己評価と教員評価

図 2 実習体験 (見学・参加) 内容

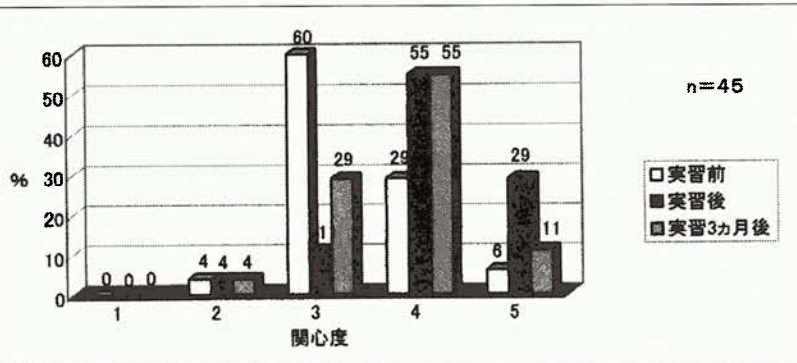
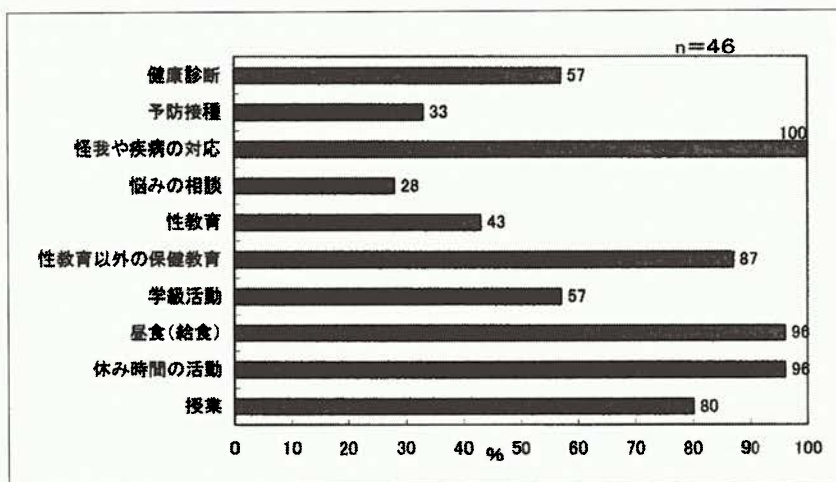


図 3 実習前・直後・3ヵ月後の思春期の対象への関心の変化

過去の性教育の資料や教材を調べ、生徒や学校関係者から話を聴くことで、性教育について学んでいる学生もいたが、学生間で学習の到達度に差が認められたため、平均点が低い結果となっていた。6項目において、教員の評価に対して、学生の自己評価は低い傾向であった。

2) 実習体験内容 (図2)

実習体験(見学・参加)内容はけがや疾病の対応(100%), 性教育以外の保健教育(87%), 昼食(96%), 休み時間の活動(96%), 授業(80%)が80%以上の学生が体験できた。予防接種(33%), 悩みの相談(28%), 性教育(43%)の体験が50%以下と低値であった。

2. 学生へのアンケート結果

1) 思春期の対象への関心度 (図3)

実習前、関心度3が60%, 関心度4が29%であったが、実習直後には関心度4が55%に上昇し、関心度5が29%と有意($p<0.001$)に関心度が上昇した。しかし、実習3か月後では関心度4は55%と実習直後と変化なかったが関心度5が11%と実習直後に比較して有意($p=0.05$)に低下した。

2) 思春期の対象とかかわった経験 (図4・図5)

実習前に思春期の対象とかかわった経験がある学生は22%であったが、実習3か月後には51%と上昇した。

3) 思春期の対象に援助した経験 (図5・図6)

実習前に思春期の対象に援助した経験がある学生は11%であったが、実習3か月後には40%と上昇した。その内容として重複回答を含め、話をした(74%), 訴えや悩みを聞いた(35%), 教えた(30%), その他(4%)であった。

Ⅲ. 考 察

1. 成果

学生のアンケート結果から実習前に比べ実習後は思春期の対象への関心が高まったことがわかった。また、実習前には、思春期の対象とかかわった経験がある実習は22%で、思春期の対象に援助した経験がある学生は11%にすぎなかったが実習を通して思春期の対象とかかわる体験をしたことで、実習後3か月間に、思春期の対象とかかわった経験がある学生が51%いたことや思春期の対象に援助した経験がある学生が40%いたことは思春期の対象への関心が高まった結果だと考えられる。

実習の成果に影響したこととして、多くの実習体験(見学・参加)ができたことが要因にあったと思われる。特に保健室でのけがや疾病の対応により、思春期の特徴としての身体的発育やおこりやすい疾病について知ることができていた。また、学級での昼食・休み時間・授業の様子を観察し、多くの生徒とかかわることで、思春期の精神的発達についても知ることができた学生がいた。この

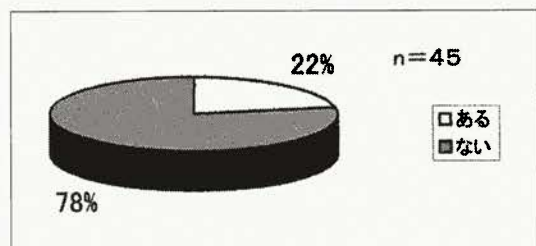


図4 高校卒業から実習前に思春期の対象へかかわった経験

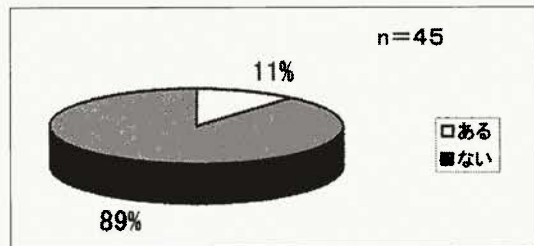


図6 高校卒業から実習前に思春期の対象へ援助した経験

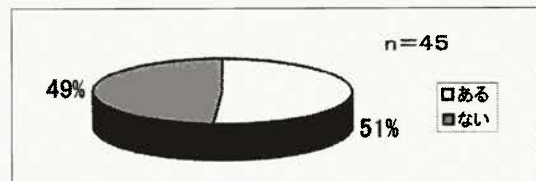


図5 実習後3か月間に思春期の対象へかかわった経験

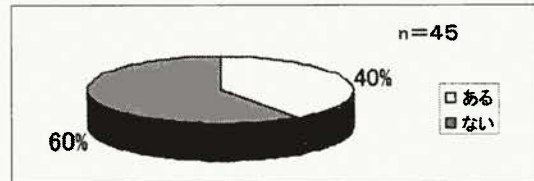


図7 実習後3か月に思春期の対象へ援助した経験

ように、実習体験から現代の思春期の身体的・精神的発達の特徴や健康問題を知ることで、思春期の対象への看護の役割として、援助の必要性を実感できたと思われる。そのことから、母性・父性としての役割・機能を健全に発揮できるようにするために健康の保持増進のための性教育や性教育以外の保健教育の大切さも認識し、自主的に保健教育の見学・参加にいったと考える。また、学習到達の評価において、6項目について、教員評価に比べて学生評価が低かった。学生が実習記録に表現した内容から、学生は思春期の対象ともしっかりとかわり、思春期の対象を理解したいと考えていると感じた。そして、実習反省会で、実習で体験した内容と方法や実習目標別に学習した内容を発表し、学びを共有できたことで、実習後においても、思春期の対象への関心を継続できた学生がいたと思われる。

2. 今後の課題

現在の基礎看護教育においては、養護教諭の教育実習と異なり、学生自身で学習指導案を作成して教育学習を行う保健教育の実施には無理がある。そのため学校の教育計画に参加しながら、保健教育を学ぶ必要がある。性教育を見学・参加できた学生が43%と半数以下であったことから、実習目標の「母性・父性としての健全な発達のための性教育の内容と方法を述べることができる」の学習到達についても低い結果であったと考える。今後、各学校の性教育の取り組みの実態やその時期を把握したうえで、小学校と中学校の実習目標や学習内容を具体的に検討していきたい。そして、性教育に学生が見学・参加できるように実習時期を見直し、学校保健を担う校長・教頭・保健主事・養護教諭・学級担任と連携をはかって実習指導を充実させたいと思う。

今回の結果から、思春期の対象への関心を非常にであると答えた学生が実習直後と比べて、実習3か月後は減少していることがわかった。思春期の対象への関心を継続させることが課題であると考える。松本が「看護職は科学的立場から性教育にかかわれるという点で大きな利点があり、それをいかにして性教育に携わることが重要な役割でもある」²⁾と述べるように、実習により思春期の対

象に関心を示した学生に対して、実習後にも自主的に地域や学校の性教育に参加し、思春期の対象への看護の役割を認識できるかわりを継続していくことが必要であるとする。これからも思春期の対象に関心をもち、思春期の健康の保持増進に取り組める看護師の育成に努めたいと思う。

IV. おわりに

母性看護学実習に小・中学校保健実習を取り入れたことにより、いままでかわる機会が少なかった思春期の対象を観察し、直接かわる体験を通して、思春期の対象への関心を高めることができた。さらに、地域の学校関係者と連携して、思春期の看護への関心を高めることができる教育の充実に努めていきたいと考える。また、思春期の対象や学校関係者からのご意見を取り入れ、社会から期待される看護の役割を追求していきたい。

謝辞

今回の実習にご協力していただいた23校の小・中学生の生徒の皆様、学校関係者の皆様に感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) 清水凡生：総合思春期学、225～246、診断と治療社、東京、2001。
- 2) 松本清一：系統看護学講座、専門23、母性看護学1、154～176、医学書院、2001。
- 3) 前原澄子：少子化時代の母子看護、看護展望、26：70、2001。
- 4) 松本清一、高村澄子：性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング、30、小学館、東京、2000。
- 5) 若林早苗、藤岡完治、小此木知世、安倍勝子、箭内清美：看護学生が描く母性看護の対象を広げることに焦点を当てた授業の展開、第31回母性看護論文集、38～40、2001。
- 6) 田邊美智子、水野美保、松原紀美代、天谷祥子、中根直子：女性のライフサイクルとリプロダクティブヘルス、看護、53：121～134、2001。
- 7) 内田貞子、高村寿子：性教育での家庭・地域・学校の連携の例、思春期学、19：52～57、2001。
- 8) 仲宗根正：地域における思春期保健、思春期学、19：58～63、2001。
- 9) 松本光子、宮地緑：看護学臨地実習ハンドブック、131～150、金芳堂、京都、1999。
- 10) 「看護教育」編集室：母性看護学カリキュラム案

- とその展開. 30～35, 医学書院, 東京, 1996.
- 11) 日本看護学校協議会: 最新看護学ガイダンス. 210
～235, 医歯薬出版, 東京, 1999.
- 12) 山田里津: 最新看護学教育ガイダンス. 臨地実習
編, 219～238, 医歯薬出版, 東京, 1999.
- 13) 高石昌弘ら: 学校保健マニュアル. P1-50, 南山
堂, 2001.

(受付: 平成13年12月19日)
(受理: 平成15年2月17日)